

歴史を歩く 24

『戦国時代の群像』

第九話 肝付氏と伊東氏



後迫集落（仮宿台地南端部）を中心にかつて『竜相城』という中世の城があった。築城の時期は不明だが、貴族社会から武家社会へと移行する平安時代末期頃の築城だろうと推測されている。この竜相城があったとされる場所から東へ直線で約400m、田原川

を挟んだ対岸の水田地帯の中に、かつて東西に長く広がる丘があったという。その丘は昭和35年頃に砂鉄採掘のため無くなり、今となっては丘のあった形跡すら確認できない。

平坦地にぼっかり浮かんでいたというこの丘は、かつては『シガ島』と呼ばれていた。漢字で書くと、『志賀島』・『戦ヶ島』・『椎ヶ島』という

るな明記がある。『大崎名勝誌』には『戦ヶ島』と記されている。その名のとおり、今から約450年前にこのあたりで大きな戦があった。

1540年代、高山城主肝付兼統は大隅半島における覇権を確かなものにしていった。しかし、一方で時代は新たな展開を見せるようになる。

天文14年（1545年）3月18日、肝付兼統の台頭と、日向の伊東義祐に苦しんだ飢肥城主島津忠広（豊州島津家第4代当主）と都城城主北郷忠相は伊集院に赴き、島津貴久を薩摩・大隅・日向三州の守護職として認め、仰ぐことを誓った。こうして大隅半島における島津実久

党は島津貴久に帰順し、三州大乱は終結を迎えたわけである。翌年の天文15年（1546年）

一月二十一日、北郷忠相の長子である北郷忠親は、兵を率いて飢肥に行き、島津忠広の伊東氏の攻撃に備えて援助に就いていた。しかし、この時に忠広の養子であった賀久が急死し、跡継ぎを失った忠広は、島津貴久の許可を得て忠親を養子にすることにした。島津忠広は隠居し、北郷忠親は豊州島津家第5代当主として飢肥に迎えられ、島津忠親となった。一方、都城城主の家督は忠親の子久豊（のちの時久）が継ぐこととなった。これによって豊州島津氏と都城北郷氏は実の父子によってさらに強力に結ばれたわけである。

さて、三州大乱の終結によって、島津本家内の対立関係は解消されたが、大隅半島における肝付氏と豊州島津氏・北郷氏両氏との溝は決して修復されることはなかった。それどころか、この時期豊州島津氏・北郷氏にとつて因縁の敵であった伊東氏と肝付氏が姻戚関係となった。伊東義祐の娘を肝付兼統の息子良兼が妻に迎えたのである。これによって肝付氏と豊州島津

氏・北郷氏は再び対立することになった。

日向においては、伊東義祐の時代、佐土原城（宮崎市佐土原町）を中心に、領内に最大48箇所の外城・砦を築き、伊東氏の最盛期を迎えていた。伊東氏は、戦国期において薩摩・大隅・日向三州の守護職である島津宗家とも対立を深めており、特に日向南部に対する侵攻は、島津氏にとつて脅威であった。

従って、肝付兼統が豊州島津



▲戦ヶ島古戦場跡

氏・北郷氏に対抗するためとは言え、伊東氏と手を結んだことは、後々兼統の義父島津忠良、そして義弟島津貴久との関係において暗い影を落とすことになったのは想像に難くない。

天文22年（1553年）1月、伊東義祐が飢肥の島津忠親に対して攻撃を仕掛けてきた。そして、これに応ずるかのよう

に肝付兼統もまた同年7月6日に、兵を遣わして忠親の属城である志布志城を攻めた。志布志を守っていた齧武清によって食い止められ、肝付軍は一旦兵を引き上げた。

この時に、兼統によって派兵された一団が、竜相城（『大崎城』と同一と見て良いと考える）の一軍であったろうことは、『大崎町史』でも救仁郷断二は述べているが、筆者としてもほぼ間違いないと推測している。

それを示すかのように、この翌年、齧武清が竜相城に報復攻撃を仕掛けてきた。本町における最も凄惨な戦い『戦ヶ島の合戦』の始まりである。（大崎町教育委員会内村憲和）